

菅又厚美作 「**独り暮らしは甘くない**」

飯野和夫 (オフ)真由美! 久しぶり!
山口真弓 あ、和夫! どうしてたのよお。
和夫 うん。いろいろあって連絡できなくて、ごめん。
真弓 うん。心配してたんだから。おじさん、おばさん、元気?
和夫 …と思うけど。
真弓 「思う」って、何よ。
ナレーション 声の主は、飯野和夫と山口真弓。共に高校2年生。2人は幼なじみで、去年の夏休みまでは、高校も同じ青春高校だったのですが、和夫は家の都合で、隣の横浜に引っ越していったのです。今日は久しぶりにその和夫が真弓を訪ねてきたのです。

《タイトル》

和夫 真弓。あのさ、最初は父も母も一緒だったんだ。でも、まだこっちにいる時、父親の会社、倒産しちゃってさ。それで母との仲が気まずくなって、とうとう横浜に移ってから別れちゃったんだ。おれも、“この際”と思って、アパート借りて独り暮らしを始めたんだよ。
真弓 全然そんなこと話してくれなかったじゃない。
和夫 だってあの時は恥ずかしいと思ってたから…。でも今、こうして真弓に会いに来られるなんて。やっぱり神様のお陰だな。
真弓 いきなり神様なんて。どうしちゃったのよ。
和夫 あのさ、おれ、クリスチャンになったんだ。このごろ教会に通ってたよ。独りで暮らして、おれなりにいろんな悩み抱えてたから…。
真弓 へえ、そうなんだ。わたしなら、独り暮らしって最高だな! なんだって自由じゃない? 実はわたしも始めるの。ほら、青春高校は厳しくないでしょ? 母も「いい」って言ってるし。来週移るのよ。学校の近くのアパート。
和夫 そう。真弓は一人っ子だから、大抵のことは思い通りになるもんね。まあ、そう決めたんなら真弓の自由だけど、現実には甘くないよ。おれたち、まだ高校生だからな。
真弓 あ、それは大丈夫。うちで家賃出してくれるの。
和夫 そうなんだ。
(効果音) (玄関のチャイム)
真弓 あ、ちょっと待って。(遠くに)武志?
河合武志 (遠くから)真弓、もう行ける?
真弓 うん。その前に友達来てるの。(和夫に)和夫は知らないわね。河合武志君。

わたしの彼氏。

武志

よろしく。

真弓

わたしたち、買い物に行くの。今日は久しぶりにうれしかった。またね。

ナレーション

そして1週間後、真弓はアパートに移り、環境の真新しさと、自由になれた喜びで、しばらくは楽しい生活が続きました。そんなある日――。

真弓

お母さん？ ねえ、全然お小遣いがないの。武志とも遊べないし、学校のお昼も、ろくなものが食べられないの。

母

(フィルター音)何を言ってるの。自分で独り暮らしをするんだって言ったんじゃない。お母さんは知りませんよ。

真弓

ねえ、今だって浩子が遊びに来てるのよ。夕食、外に行こうと思ってるの。

母

(フィルター音)真弓ちゃん。あなたのは独り暮らしとは言えません。家に電話をすればお金が入るとでも思ってるの？ 自分でどうすることもできないのなら今すぐやめなさい。

真弓

じゃあいいわよ！ もう頼まない！

(効果音)

(激しく受話器を置く音)

吉田浩子

お母さん、ダメだって？

真弓

うん…。

武志

よお、真弓。もうやめて家帰れよ。

真弓

武志まで何よ。

武志

だって、最初っから真弓にはムリだと思ってたんだよ、おれ。

真弓

どうしたことよ。お金がないから？ 使いすぎるから？ 武志はケチなのよ。

武志

そうじゃないよ。おれ、自由に生き生きした真弓が好きだ。でも、今の真弓は、“自由”じゃなくて“勝手”だよ。

浩子

言いすぎじゃない？

武志

浩子も友達だったら、少しは考えてやるべきだよ。真弓の身になってさあ。

浩子

余計なお世話。ちゃんと考えてるわよ。だからこうしていつも遊びに来てあげてんじゃない。寂しいんじゃないかと思って！

武志

話にならないね。2人とも、まだガキだな。おれ、少し考えたいよ。真弓、しばらく会うのやめよう。(立ち去ろうとする)

真弓

武志！ ちょっと待って、武志！

浩子

武志！

(効果音)

(ドアが閉まる音)

真弓(モノローグ)

“自由”じゃなくて“勝手”かあ。武志に一番痛いこと言われちゃった。分かってたの、心の中では。でも、どうすればいいのよ、どうすれば？ 独りになったら変われると思ったのに…。(ベソをかく)

浩子

真弓、お金はなんとかするよ。そんなに落ち込まないで。

真弓 浩子、ちっとも分かってない。わたしが家を出たのは、ほんとは自由になりたかったんじゃない。あんまり自由すぎて怖かったの。父も母も、わたしの言うことはなんでも聞いてくれる。なんでも自分の思い通りになる。自分の中で、わがままな、イヤな自分がどんどん大きくなっていく。本当の自分がどこにいるのか、どこに行こうとしているのか、だんだん分からなくなっていく。それが恐ろしかったのよ。

浩子 へえー、そんなこと考えてたの？

真弓 独りになって、自分で少しは苦労して、そばに、わたしのことなんでも言ってくれる友達がいたらって思った。でも浩子、あんたは結局、母と同じよ。わたしの思い通りにさせてくれるだけ。なんか、あんたがいると、わたしますますダメになりそう。浩子、お願い、帰って。独りにして！

浩子 …分かったよ。わたしなりにあんたのことと思ってんのに、分かってないのはそっちじゃない。いいわよ、もう来ないから！ 独りっきりで、いつまでもウジウジ考えてりゃいいよ。じゃあね、バイバイ。

(効果音) (ドアが荒々しく閉まる音)

真弓(モノローグ) これで、ほんとに独りぼっちだ。それにスッカラカン。…和夫ならどうしたかなあ。バイト…？ そうだ、自分でお金を作ればいいんだ。

ナレーション そう思いつくと、真弓は早速、喫茶店を何軒か探し歩いて、ウエートレスのアルバイトを見つけ出したのでした。それから何日かしたある休日、横浜の和夫が、真弓のアルバイト先を訪ねてきました。

和夫(モノローグ) 真弓のアパートは 3 丁目の“ポッポ”だから、この辺なんだけど…。あ、あった！

(効果音) (カランカランと喫茶店のドアが開く音)

真弓 いらっしやいませ。…あ、和夫！

和夫 元気？ 休みだから来ちゃったよ。今、大丈夫？

マスター 真弓ちゃんの友達？ 今 暇だから休憩とっていいよ。

真弓 ありがとう、マスター。

(効果音) (コーヒーカップの音)

真弓 わたし、和夫が「独り暮らしは甘くない」って言ったこと、つくづく考えさせられたの。ありがと。今までの友達なんて、わたしがわがままだから一緒にいて、機嫌が悪くなるとやだからって、ご機嫌とりばかりで、結局、家にいるときとちっとも変わらないの。それでわたし、その友達に、浩子っていうんだけど、「あんたがいたら、わたしがダメになる」って言っちゃった。怒って帰って、それっきりだけど。

和夫 河合君は？

真弓 武志？ うん、ケンカしてしばらく会ってないけど、別れ際の一言がグサッと来

た。「お前のは“自由”じゃなくて“勝手”だ」って。

和夫 そう。真弓のこと、お祈りしてたんだ。

真弓 お祈り？

和夫 うん。「真弓が独り暮らしをするんなら、ただ生活の苦勞をするだけじゃなくて、その中で、本当の自分を見つけ出すことができますように」って。

真弓 え、ほんとに？ それって、わたしが一番悩んでたことなの。

和夫 そうか。実は、おれが教会に行ったのも、それが一番の理由だったんだ。おれの場合は逆だ。独り暮らしで自由になった代わりに、おれのことを見てる人がいなくなって、自分の生き方、考え方が正しいのか、間違っているのか…、うまく言えないけど、“自分”って存在が全く分からなくなってしまったんだ。

真弓 ふーん。それで教会に行ったんだ。ねえ、和夫。教会って楽しいの？

和夫 うん。イエス様を信じて、聖書の言葉に従っていけば、ありのままの自分でいいんだって確信が持てるようになった。それに、教会にはいろんな人がいる。みんな結構カッコいい。なんて言うのかな、ひと言で言えば、一人一人生き生きしてるんだな。

真弓 ふーん。行くのはだれでもいいの？

和夫 うん。真弓、一度来てみなよ。

真弓 お金はたくさんかかるの、かなあ？

和夫 おいおい真弓、すっかり経済観念、身に着いちゃったな。大丈夫、心配無用。それからさ、真弓。ひとつだけ忠告しとくよ。君がそんなに変わったから、河合君はまた仲良しになってくれると思うけど、浩子さん、つつけ？ 彼女とも仲直りしたほうがいいと思うな。

真弓 うん。あの時は自分のことで精一杯だったけど、このごろすごく気になってんの。ひどいこと言っちゃったって。

和夫 そう。真弓の独り暮らし、無駄じゃなかったね。やっぱし、神様のお導きかな。

真弓 また神様？(2人、笑い)

ナレーション 真弓は、なんだかくすぐったいような、それでいて、今まで味わったことのない暖かいものが、心の中にわき上がってくるのを感じました。

その夜、真弓は母に手紙を書きました。

真弓 「お母さん、真弓は今、“ポッポ”というお店でバイトをしながら、学校へ通っています。」(話し口調に)遅くまで働いた次の日は、少し嫌いな世界史の時や、英語の時間に寝ちゃいます。でも頑張って、成績を下げないようにしています。この前、和夫君とまた会って、いろいろ話したの。和夫君は教会にも行ってて、とっても立派です。両親が別れたため、独り暮らしを始めて、1年。だけど、とてもたくましくなって驚きました。わたしも、“独りになって自分を見つめなおしたい”と思ったのは本当なんだけど、やっぱりお母さんに甘えてて、頼りっぱ

なしだったこと、深く考え直しました。わたしはまだまだ子供だし、働きながら勉強って本当に大変だけど、家には帰りません。もうしばらく独りでやってみます。お母さん、心配や迷惑をかけてばかりで、ごめんなさい。今度の日曜日、和夫君と教会に行ってきます。とてもすてきな神様のお話が聞けるそうです。じゃまた。体に気をつけてね。お父さんと仲良くね。真弓。

ナレーション

真弓は、その時、自分のために祈ってると言った、あのまぶしいような和夫の横顔を思い出していました。そして、「自分もいつか和夫のようになれるかな」と思ったのでした。

<完>